

第三編 // 人見の生活と文化

第一章 人見の教育と文化

I 人見の教育

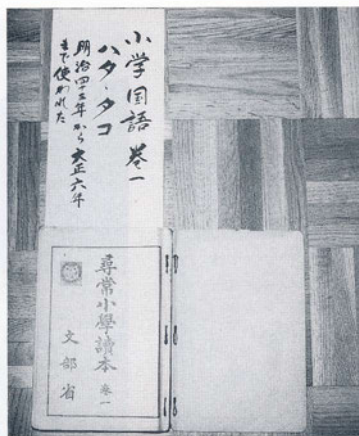
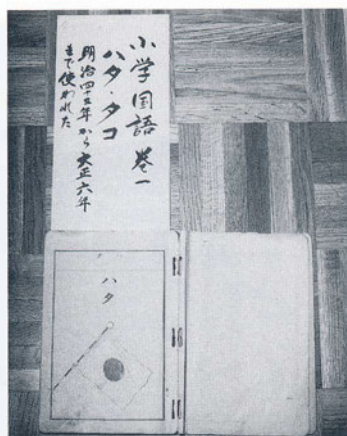
江戸時代の教育機関といえは寺子屋や私塾が有名だが、近江屋甚兵衛も晩年、子供や若者を集めて読み書きを教えている。

記録によると、中野村長安寺の一隅を借りて中野小学校が開設されたのは、明治六年四月である。つづいて明治七年一月、人見村薬師堂で人見校が開校している。なぜ小学校でないのか、その内容はどんなものであったか定かでない。一説によると寺子屋風のもので、そのせいではないかという人もいる。

同年五月には、坂田村にも長福寺の一隅を借りて坂田小学校が開校している。同校は坂田・大和田を学区に定めている。

また明治一〇年一月には、貞元村神將寺に貞元小学校が設置され、これに伴って中野小学校は同校に合併されている。そして翌年の一月、人見校、畑沢校が坂田尋常小学校に合併されている。なお、明治一九年ごろ畑沢校はまた分離独立している。

明治三年六月二十七日、中野・坂田の両尋常小学校が合併し、周西尋常小学校が誕生した。初代校長は坂本安五郎で、位置を中野に定め、三学級編成であった。児童数は男



尋常小学讀本=相川資料館提供

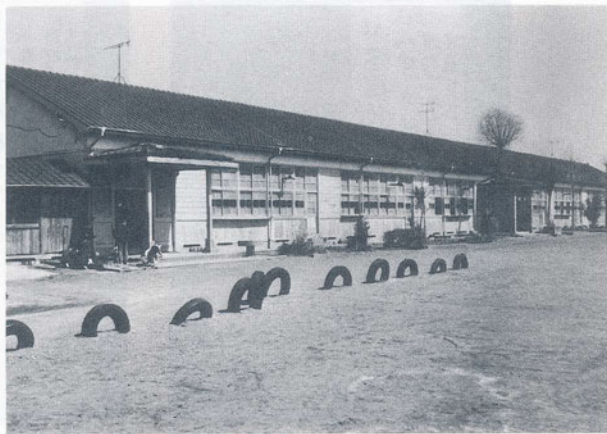
一九名、女一七名。しかし、校舎ができるのはずっと後で、それまでは中野・坂田両校が仮教場となった。このときの授業料に関する資料が残っている。それによると最高・最低額があって、尋常科は最高五銭、最低三銭、高等科は最高一三銭、最低一〇銭ととなっている。なぜ最高と最低があったのか、その納入の基準はどうなっていたか、定かなものは残っていない。なお、三四年には尋常科の授業料は免除され、また四二年の資料によると、高等科の授業料は最高二五銭、最低一五銭となっている。話を戻すと明治三一年七月には、周西尋常小学校に高等科が設置されている。明治三三年三月には学級が増設され、尋常科四学級、高等科二学級となっている。三六年一二月の児童数は三四人である。

周西尋常高等小学校の校舎建設が起工したのは明治三九年一二月二九日、四〇年二月二六日に上棟式が行なわれた。しかし、おりからの強風で全潰、四月八日、改めて起工している。五月二四日、上棟式が挙行され、待望の第一、第二校舎が竣工したのは四〇年八月二九日である。建物面積二〇四坪強、建設費五、七三三円となっている。同年一〇月、便所、小使室、炊事場などが増設され、四一年四月には、尋常科五学級、高等科一学級、四二年二月には尋常科六学級、高等科一学級の編成替えが行なわれている。なお、義務教育六年制が施行されたのは明治四一年である。四五年八月の児童数は四〇四人。大正七年五月に補修学校々舎が建設され、同八年四月には高等科が二学級に増強されている。

大正一二年九月、関東地区は歴史を揺るがす大地震に見舞われた。首都東京をはじめ各地で被害が続出し、周西小学校の校舎も全潰の憂き目をみた。このため高等科は青蓮



小学国語 = 相川資料館提供



旧周西小学校の校舎

寺に、尋常科は坂田の長福寺に收容され、仮校舎として授業が続行された。倒壊した校舎が再建されたのは一五年九月であった。

人見の児童はもろろんこの周西小学校に通ったが、同校は昭和に入ってからさらに学級が増強されている。昭和九年四月に尋常科は八学級に、翌一〇年にはさらに九学級に増え、同年一〇月の児童数は五〇二人になっている。

一一年七月には第三校舎が増築され、一二年四月には尋常科が一〇学級、一五年四月には一一学級と増え、一六年四月には高等科も三学級に拡大している。また、同年に改正された学校令により、周西尋常小学校は周西国民学校と改称された。一九年四月の学級数は尋常科一二、高等科四、児童数も九五四名と増大している。

二一年四月、周西小学校後援会が発足し、二二年四月には学校教育法の改正で、周西国民学校を周西小学校に改称。高等科は廃止され、君津中学校が創設された。初代校長は小川政吉であった。周西小学校のPTAが発足したのは二三年五月、各施設もしいに拡充されていった。二五年九月に第四校舎が竣工、一七学級編成、児童数七六九人を数えている。

いわば周西小学校は、人見に住み、人見で育っていく人たちにとって教育の拠点であった。しかし、半農半漁時代の人見では、農繁期や海苔の収穫期には家事の手伝いをする児童も多かった。

こうした教育風土や教育観に大変革を与えたのは、八幡製鐵(株)(現新日本製鐵)の進出に伴う、社会環境の変化であろう。八幡製鐵(株)の企業進出に伴って、北九州市をはじめ全国各地からの転勤者が大量に移住し、児童数も急激に増大した。このため君津町で



小学国語読本=相川資料館提供



旧周西小学校の講堂

はその対応に追われることになる。

その前に君津町の人口動勢をみると、昭和三五年に一二、九一〇人だったものが、三九年には一二、八〇二人となり、むしろ漸減している。これに対し三九年から四二年の三年間は八二八人増、特に四二年一〇月から四三年九月の一年間は七、二三七人と急増している。いわゆる八幡製鐵(株)の民族の大移動としてマスコミに話題を提供した時代である。この人口増加現象は、君津製鐵所の拡充計画に比例してその後も続くことになる。

こうした人口変化のなかで、君津町における学校の状況をみると、昭和三五年は、小学校四、中学校二で、児童・生徒の総数は二、七五一人であった。この児童・生徒数も四一年は二、〇六五人とむしろ漸減している。ところが四二年以降は急激に増大し、四三年二月二、五六〇人、四七年四月には六、一二六人となっている。それも君津製鐵所の社宅地区を学区とする八重原小学校、君津中学校の増加が著しかった。八重原小学校の場合、四二年四月三四七人だった児童数が四三年二月には六七八人の九五%増。激しいときは一日一〇〇人の転校生があったという。君津中学校を同年比で見ると五八六人から六四二人の九・五%増となっている。一方、大和田団地を学区とする周西小学校は五一二人から六〇一人と一七・四%増加し、この三校で君津町の生徒・児童増加分の九五%以上を占めている。

このため君津町では、プレハブの仮校舎で対応していた周西小学校を分割して、昭和四三年度に大和田小学校を開校し、合わせて周西中学校も新設された。初代校長は大和田小学校が小倉長、周西中学校が田丸武雄であった。さらに四六年度には坂田小学校と県立君津高校が新設されている。

なお、大量な移住者を迎えることによって、学校教育も一時は大きな混乱のあったことを付言しておきたい。その代表は言葉の違いであろう。たとえば地元の子供たちが九州弁や東北弁を覚えて家で使い、親を驚かせたり、九州出身の子供が地元弁を覚えて家族を笑わせるなど。また、九州弁の「スカン」に、千葉弁の特色である語尾の「…べ」をつけて、「スカンべ」という奇妙な新語も生まれている。さすがに子供たちは適応力に富み、快活そのものである。

子供たちの考え方の相違の一つとして、次のような例があげられる。北九州から転校した児童が、春、山から筍をとってくるという事件が起こった。いわば盗みだが、教師の説明によると、その子は盗みの意識はなく、ただ自然に生えているものを取ってきたという感覚であったという。地域の子供であれば、それが誰の山であるかを知っており、当然、その行為は盗みという意識につながる。また、都会では普通になっている腕時計を着けての通学は、地元では禁止事項であった。こうした生活様式や生活環境の違いからくる考え方の相違は、随所に見られた。変革期の泣き笑いのエピソードだが、いつかこの子供たちが歴史的な伝統を継承しながら、新たな感覚をもって新たな都市づくりに参画することであろう。

(1) 周西中学校

周西中学校は、八幡製鐵(株) (現新日鐵) およびその関連会社の進出による社宅の建設により、君津中学校々区の生徒が急増し、収容不可能になったため、昭和四三年四月一日に新設を決定した。が、普通教室および管理棟のできる四四年五月三十一日までは君津中学校の特別教室などを借用して授業をすすめ、四四年六月、新築校舎に移った。その

君津市立周西中学校校歌

作詞 鈴木 昌次
作曲 長谷川良夫

(一) ならだかに緑つらなり

歌声はずむ丘の上

潮風を深く吸い込み

真向いに富士を仰げば

雲光り胸はたかなる

ああ周西中学校

若い希望ここにあふれる

(二) 青空を遠く見つめて

思いをこらすまなざしよ

広々と開く行く手に

友情の明かりかかげて

あくまでも真理求める

ああ周西中学校

若いひとみに輝け

(三) 世の姿はげしく移り

時代の荒波荒れるとも

ゆるぎなく堅く鍛えて

鉄の町 世界の君津

その誇り高くかざそう

ああ周西中学校

若い力ここにみなぎる

若い力ここにみなぎる

後、特別教室棟が増強されるなど、同中学校の概要は次のとおりである。

(一) 普通教室および管理棟

▼建築面積Ⅱ二、八九一平方メートル

▼構造Ⅱ鉄筋コンクリート造り四階建て

▼内容Ⅱ普通教室一五、特殊学級室二、および管理棟

▼経費Ⅱ一〇七、〇〇〇千円

▼工期Ⅱ昭和四三年一〇月二六日～四四年五月三一日

▼設計者Ⅱ翼建築設計事務所

▼施工者Ⅱ日本国土開発株式会社

(二) 特別教室棟

▼建築面積Ⅲ三、四二二平方メートル

▼構造Ⅱ鉄筋コンクリート造り四階建て

▼内容Ⅱ特別教室一四室、準備室など

▼経費Ⅱ一三二、二〇〇千円

▼工期Ⅱ昭和四四年九月二〇日～四五年三月三一日

▼設計者Ⅱ翼建築設計事務所

▼施工者Ⅱ日本国土開発株式会社

(2) 大和田小学校

大和田小学校は、八幡製鐵(株)(現新日鐵)およびその関連会社の進出による社宅の建設により、周西小学校の児童が急増し、収容不可能になったため、昭和四三年四月一日



周西中学校



大和田小学校

に新設を決定したが、新校舎が完成するまでは周西小学校の校舎の一部を借用する一方、校庭に仮設校舎六室を建て、さらに六室を追加建設したほか、講堂を間仕切りして職員室、音楽室を確保するなど、きわめて窮屈な状態で授業が行なわれた。そうした背景のなかで昭和四四年三月一五日に着工し、同年一二月二四日に完成した大和田小学校の概要は次のとおり

▽建築面積Ⅱ八、二二〇平方メートル

▽構造Ⅱ鉄筋コンクリート造り三階建て

▽内容Ⅱ普通教室三〇、特別教室六、その他管理棟

▽経費Ⅱ三三五、〇〇〇千円

▽設計者Ⅱ石井一級建築士事務所

▽施工者Ⅱ日本国土開発株式会社

(3) 君津市立周西幼稚園

昭和三六年八月一〇日、君津漁業協同組合は漁業権を譲渡し、千葉県知事柴田等氏と妥結式を行なった。この間、組合と町と種々折衝があり、補償金の税金の指導、転業漁民の指導などが行なわれた。その折衝の過程で、町に一ヵ所もない幼稚園を人見地区に設置し、転業漁民の児童を優先的に教育することについての要望が組合側から出された。財政的に厳しい君津町であったが、この要望を受け入れた町では、県下でも少ない公立幼稚園の建設を人見八七七番地に決めた。同幼稚園は昭和四一年四月一日に開園した。初代園長は多田保で、園の概要は次のとおり。なお、昭和四三年四月、人見地区池田に同園を移設、現在にいたっている。

君津市立大和田小学校校歌

作詞 村越利一良
作曲 海沼 実

(一)

東京湾の朝風に
鳴るよ 日の丸 ひるがえる
すべてのものが 芽ぐむとき
学びの窓に 光りあれ
われらの 大和田小学校

(二)

鹿野の山の 日にはえる
流れゆたかな 小糸川
鍛えよ 友よ 身とこころ
根性に耐える 誇りあり
われらの 大和田小学校

(三)

はるかに 富士は かがやきて
鉄のけむりが 立ちのぼる
六とせを育つ 学びやに
文化の息ぶき 新たなり
われらの 大和田小学校

▽建築面積Ⅱ四四三・五一平方メートル

▽敷地面積Ⅱ二、八二九・七五平方メートル

▽内容Ⅱ木造平家建て

▽経費Ⅱ七、二一〇千円

▽開設当時児童数Ⅱ五七名、二学級

(4) 君津中央公民館周西分館

都市化の進展に伴って社会教育の充実が急務とされるなかで、地域文化育成の拠点として、昭和五年三月三〇日、人見五街区に周西分館が完成した。

それまでの公民館活動は、改修した周西小学校の図書館や、青年館、集会所を借用して行なわれていた。しかし、区画整理事業の進捗による居住者の急増や社会環境の変化に伴って、公民館建設に関する住民からの要請が高まり、ついにその夢が実現した。

周西分館の規模は、敷地面積約四六五平方メートル、建築面積約一九〇平方メートル、延べ床面積約一八七平方メートル。小会議室、大会議室、厨房などからなる平屋建てで、建築費用は約一、五〇〇万円。

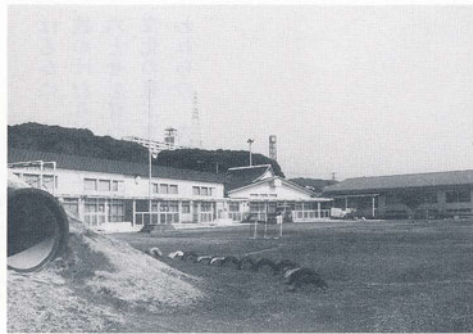
同館は現在、地域住民の交流や親睦の場として、各種の催しや、趣味、教育、会合の場として有効に利用されているほか、子供たちを対象とした柔道、合気道などスポーツ施設としての役割も果たしている。地域文化の育成と興隆に今後も大いに活用されることになろう。

(5) 人見青年館

大正年代、人見公会堂は青蓮寺境内の西側一角に設置されていた。あまり大きな建物



君津中央公民館周西分館



周西幼稚園

ではなかったが、区民の集会所として、さまざまな連絡や会議、催しごとや娯楽の場として利用された。人見の今日を語るとき公会堂なしではいられぬほど、歴史のしみこんだ建物であった。しかしこの公会堂も戦争という悪夢のなかで、移転せざるを得なくなつた。

昭和一六年代に入り、支那事変は第二次大戦へと発展し、拡大する戦局のなかで当地出身の戦死者も増大した。悲しい公報が増えるに伴って、その墓地に窮した青蓮寺では公会堂の敷地をそれに当てるべく、移転の申入れを行なうことになる。

この青蓮寺の要請に基づいて、ときの区長・白井保は地区総会を召集し、この席で区民の同意をえたのである。代替地として、祭礼用地として利用していた区有地が近くにあったので、これを充当して移転することになった。以来、三〇年間、ふたたび区民の憩の場として活用され、親しまれてきたが、建物もよる年波には勝てず老朽化がめだちはじめた。

おりしも企業進出の計画が具体化し、八幡製鐵(株)(現新日鐵)の進出が決定した。以来、君津地区は田園工業都市を標榜して急激な変貌をとげることになる。こうした都市構造の変化に伴って、各地区で土地区画整理事業が展開され、一方では青年館や農村協同館などの建設が促進された。

幸なことに県でも、青年活動の活性化の一環として補助制度を設け、町も協力するという形で青年館の建設が活発化した。三九年に小山野、四三年には神門と台住、四四年には本師に建設されている。

人見もまた大きく変わりつつあった。岡崎工業(株)の社宅ができ、人口も増え、こうし



人見公会堂。昭和49年に撤去される

た拡大基調のなかで公会堂の機能拡充が区民の要請として強まってきた。加えて青少年の不良化も社会的な風潮として大きな問題となりつつあった。

こうした背景のもとに青年館建設を必要とした人見では、白井千代吉、高橋敏男の両町議をお願いして相談役に就任してもらい、具体的な活動に入った。資金調達、敷地の確保など、さまざまな困難が伴ったことは否定できない。

四四年一〇月、総会が召集され、

- ・ 第一号 青年館建設に関する件
- ・ 第二号 消防詰所建設に関する件
- ・ 第三号 区有地処分に関する件

以上の議案が上程されたが、満場一致で承認された。そこで事業促進を図る「青年館建設委員会」が設置されたのである。

同委員会は、白井・高橋両町議を顧問に、委員二〇名を任命。委員長に白井吉男区長、副委員長に白井勝男副区長、会計に秋元康太郎、守久治を選任した。設計は荒井嘉男（元建設課長）に依頼した。

四四年一二月、この建設計画案は町議会の承認を得、建設は直ちに開始された。敷地は公会堂の跡地ということでスタートしたが、同地が狭く、またモーターゼーション化に伴って車の騒音も激しかったことから再検討することになり、審議の結果、青蓮寺境内が候補にあがった。同境内は地区の中央に位置していることがその一つの理由であった。

そこで住職の栗坂光道師に事情を相談したところ、寺でも利用させてもらうことを理



人見青年館

由に快諾してもらった。なお建設の資金は、区有地の田を町に売却することによって同意を得、他は県および町の助成金で補填した。工事は昭和四四年一二月に着工し、四五年三月完成した。これを祝って四月一五日、落成式が挙行された。人見青年館の概要は次のとおり。

▽構造Ⅱ木造、平家建て

▽敷地面積Ⅱ八〇四平方メートル

▽建築面積Ⅱ一四八・七三平方メートル

▽内容Ⅱ集会室（二〇四・一一平方メートル）、管理室（一九・八三平方メートル）、炊事室（七・四四平方メートル）、廊下（七・四三平方メートル）、便所（四・九六平方メートル）、玄関（四・九六平方メートル）

▽工費Ⅱ五四五万円

（県および町助成金一二〇万円）

Ⅱ 消防団活動

大正から昭和初期にかけて誕生した各町村の公設消防団は、単に火防だけでなく、非常災害にも備えた。戦時中の昭和一四年に警防団法が施行され、消防団は警防団と名称をかえ、国防の一端も担った。昭和二二年に消防法が公布され、近代的消防組織が確立した。それによると自治体機関として常備消防団、非常備消防団が設けられている。

村人から交際を阻害された村八分も、葬式と火事は二分のつき合いが残されていたら

【歴代消防分団長】												
守	宮	白	白	守	秋	高	平	守	白	守	高	守
	崎	井	井	元	橋	野	野	井	井	橋	太	倉
清	武	吉	勝	國	新	久	照	久	龜	太	太	藏
次	雄	男	男	治	仲	次	将	三	吉	吉	吉	藏
郎						郎		郎				
	高	守	平	石	高	石	守	守	高	宮	秋	守
	橋		野	井	浦	井			橋	崎	元	
		勝	吉	公	桑	正	久	春	要	喜	康	政
		男	三	吉	博	次	治	次	次	久	太	藏
									郎	雄	郎	

しい。

火事は地震、雷とともに古くから恐れられていただけに、いろいろと対策が講ぜられている。火の用心の貼り札、夜回り、天水桶の備えなど。また、各町内会に一ヵ所は必ず貯水池を設けたといわれている。

自治的な私設としての消防組が公設に変わったのは、明治四〇年ごろといわれ、人見区は大正五年（一九一六）に発足したといわれている。周西村消防組は、第一部から第六部までの構成となっていた。人見区は第三部に属し、消防器具も揃えて、万一の火災に備えた。当時の消火器は人力によるポンプ（腕用ポンプ）で、青蓮寺境内に消火器具専用の小屋を建築したとある。購入金額は三五〇円。腕用ポンプのほか消防具、組旗一、高張提灯一、鳶口一〇、運水具一五、頭巾四、手袋若干が用意されていた。

組織は部長、小頭、消防手で構成され、組員は互選で分担係員を置いた。筒先三名、鳶口一〇名、運水具五名、旗手一名、高張提灯一名、伝令一名、警報手一名という内訳である。警報手は、知らせ三点打、出方二点打、近火乱打、鎮火一点と二点打という具合に打鐘を打ちわけていた。昭和に入ると、手引きガソリンポンプが出現した。人見でも神門地区と共有ということで昭和初期に購入している。それも両地区に資金が不足したため、人見漁業組合の援助を受けている。と同時に人見・神門のほぼ中央に位置する人見漁業組合の敷地内に消防団詰所も新設された。ところが第二次大戦中、敵機の本土来襲が激化するにつれて手引きガソリンポンプは徴発されることになる。東京都の小松川の近くにある軍関係の施設で使用されたようだが、戦後、徴発が解除され、無事、地区へ戻ってきた。



ガソリンポンプを購入したときの消防団の記念写真

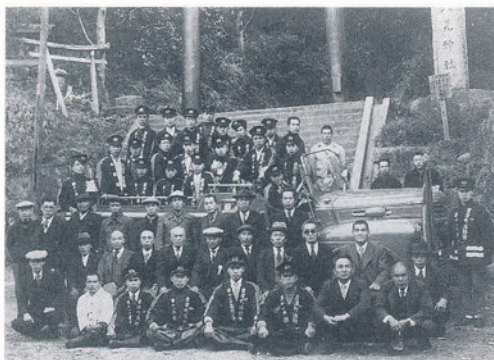
終戦後、木更津海軍航空廠第二海軍航空廠の消防自動車ポンプが払い下げられ、しばらくはこの二台を人見、神門の消防団が交互に利用し、消火にあたった。なお、払い下げられた自動車ポンプは国防色（草色）だったので、昭和二二年に赤色に色を塗り変えている。

しかし、この消防自動車ポンプも老朽したため、昭和二六年に廃車し、新たに消防自動車ポンプを購入した。そしてこれを機会に人見第一分団、神門第一二分団が誕生した。

これまで人見、神門の消防団の維持費は、人見四分、神門六分の割合であった。そこで両分団の誕生に当たって、人見は手引ガソリンポンプを引きとることになった。その後、人見では昭和三〇年度に区民の寄附により自動車ポンプを購入、三二年度には上水道による消火栓を設置した。さらに、鉄骨の火の見櫓、防火用水池なども設置した。昭和四五年、市の消防団が改革され、これに伴って、人見の消防団は大和田分団と統合された。分団の詰所も大和田分団との境界に新設し、名称も第九分団と改名された。以後、消防の各器具も市の予算によって賄われている。

Ⅲ 青年団活動

明治以降におけるわが国の青年団活動は、村の将来を担う青少年たちが社会教育、自己研鑽の場として、さらには相互のコミュニケーションや娯楽の場として、明治初期から自主・自発的に運営され、全国組織に拡大した。



消防自動車の購入を記念して＝昭和30年



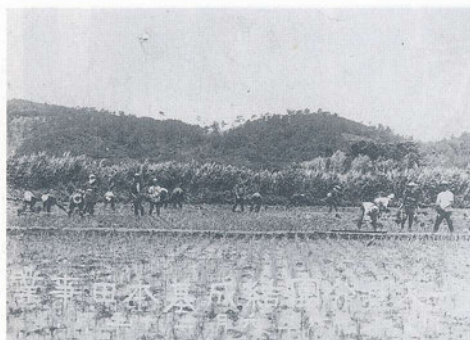
金馬簾の披露記念

こうした流れのなかで人見の青年団が組織され、活動を開始したのは、明治四四年である。いつの時代でも青年たちは、さまざまな可能性に挑戦するものだが、人見の青年団もユニークな運営や活動を実施している。

まず運営面における財源確保だが、同青年団では自作田を保有し、全員で耕作して、その収穫を換金して活動資金としたほか、みおほ濬掘りや浜掃除の主要な担い手であったことから、これらの使役によって漁業組合から支給される日当などもそれに充当した。青年団活動として今日まで語りつがれている催しとしては、大正初期から実施された素人相撲大会がある。これは青蓮寺の修復記念事業として企画されたもので、青蓮寺の境内を借りて会場とし、近郷の青年団に呼びかけて行なわれた。

相撲はわが国の国技であり、各地区に力自慢の青年たちがいた。娯楽の少ない時代でもあったし、この相撲大会に人気が集まったのは当然である。木更津の梅木、富津の星野、大貫の磯根崎、西川の十兵衛、青木の遠山・平野といったなたたる青年が参加し、わが人見からは守猶次郎、白井善吉、高橋太吉、斉藤清次郎、向井八太郎、吉浜气和治が出場し、大熱戦を展開した。青蓮寺の境内は応援者や見物人で満員の盛況であった。現在、青蓮寺の境内にある力石にその名残りをみることができる。

またこの時代、君津郡青年団が催した連合運動会も人気を呼んだ。木更津中学校（現木更津高校）の校庭で開催された同運動会には、周西村を代表して、わが人見青年団からも多くの選手が出場した。今でも語りつがれている名選手の名前をあげると中長距離の高橋太吉、高橋藤吉郎、斉藤清次郎、白井勇三郎、守国治、宮崎春吉、短距離の守好三、守久良三、白井民三、高跳びの高橋市太郎など。いずれも優秀な成績で人見青年会



青年団による自作田の田植え

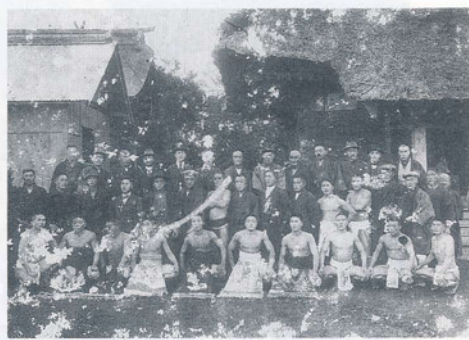
の声価を高めた。なお、そのときの長距離のコースは、木更津中学校から人見橋までの往復コースで、今日のマラソン大会のように沿道は声援する郷土の人たちで賑わった。

こうした青年団連合のスポーツ大会は、剣道やその他の競技、さらには雄弁大会（現在の弁論大会）なども催され、分団による定期的な対抗戦や大会もしばしば行なわれた。人見青年団は世帯の大きいこともあって圧倒的な強さを誇った。他の地区からの風当たりが強くなったこともあって、昭和一九年、人見青年団は人見・神門に分割、独立した。ともかく青年団対抗の各競技に対する各地区の気合いの入れようは格別で、ときには対立にまでエスカレートすることすらあった。多少の曲折はあったが、ある意味では良き時代であり、青年たちは若者らしい活気に溢れていたような気がする。

また、若者たちはこうした体育や娯楽だけに熱中していたわけではない。周西村には大正四年四月、周西実業補習学校が設置された。そして大正七年ごろから、一二月と三月の農閑期を利用した青年夜学会が設けられている。同夜学会は、小学校卒業の男子を中心に周西小学校に集まり、特別指導の教師による補習授業や講話が行なわれた。女子には補習科が設けられ、和裁・料理を中心とした授業が実施された。そして大正一二年に周西村処女会が発足している。こうした教育やふれあいの場を持ったことで若者たちの知識欲は刺激され、さらに相互交流が活発になったのである。

しかし、満州事変を契機とする軍事色の強まるなかで、昭和一〇年一〇月、全国いっせいに青年学校が開設され、これに伴って夜学もこれに併合された。教育の内容は軍事教練を中心とした軍事色の強いものであった。

戦局はさらに支那事変へと拡大し、若者たちはつぎつぎに戦場へ駆り出されていった。



相撲大会出場の人見地区の選手、後方建物は左が人見神社、右が観音堂

このため、青年団活動も事実上の活動がほとんどできなくなり、昭和一六年五月、ついに解団の止むなきにいたった。

戦後、若者たちが戦場から復員し、世情もしだいに落ち着きを取り戻したこともあって、青年団活動が復活したのは昭和二二年である。君津町青年団の下に各地区の分団が置かれ、団員の対象は年齢一五歳から二五歳ぐらまでの男女であった。わが人見青年団は男女五二人の団員で構成され、白井三佐男が戦後の初代分団長をつとめた。

当時は物資も未だ欠乏し、敗戦という精神的ショックを払拭できない状態であったが、さすがに若者たちの復元力と活力はすばらしく、意気盛んであった。人見青年団でもよく人見公会堂で会合を開き、活動計画、その他、活発な論議が夜遅くまで行なわれたものである。

青年団の主な活動をあげると、農薬散布などによる春の苗代の管理、人見浦の浜掃除、川岸の舟付場の整備、中橋の架設など、地域社会に寄与した功績は大きい。

一方、スポーツ、文化面でも人見の声価を高める多くの業績を残した。たとえば町の陸上競技大会で上位の実績を残したほか、郡・県大会に第五分会（君津、富津、青堀、飯野、貞元）の代表選手として守久治・高橋君子（短距離）、高橋政治（中距離）らが出場して大いに活躍した。また町の相撲大会でも人見の選手が大活躍した。

そのころ青年有志によって作られた新光会も注目される存在であった。守清次郎、大森功らの若きリーダーたちによって作られた同会は、新しい時代へ対応する青年たちの資質向上を目的としたものであった。俳句を守彰三（俳号 申々居）に学んだり、読書会を開いて討論したり、さらにユダヤ研究で有名な四王天延孝（二間塚居住）を招いて



人見を代表する陸上競技の各選手を囲んで

世界情勢の講義を受けるなど、きわめて意欲的であった。

その後、新光会は、君津漁業協同組合からの要請により、組合青年研究部と名称を変更し、海苔研究グループとして海苔養殖の発展に大いに貢献した。

そうした反面、日本経済の高度成長につれて、若者たちの流出が激しくなったのもこの時代である。このため青年団活動はしだいに下火になり、昭和三六年、ついに解団の止むなきにいたった。

その後、人見神社の神輿奉納が復活し、この行事に参加する若者たちによって西部青年会（人見、神門、大和田）が結成された。同青年会は、現在もお祭りの中心となって活動している。



役員選挙の記念写真



戦後、青年団の結成を記念して

戦後の人見青年分団長

(昭和)

二二二	白井三	佐男	三〇年	秋元
二二三	秋元	重雄	三一	平野
二二四	高橋	昭二	三二	守
二二五	宮崎	正雄	三三	守
二二六	秋元	久治	三四	高橋
二二七	守	久治	三五	守
二二八	宮崎	要策	三六	初雄
二二九	白井千	栄夫		武夫